

徒然の記 その八

隣組と愛国婦人会

警防団を紹介しながら、隣組と愛国婦人会に触れないのは、片手落ちになりますので、少し横道にそれてしまいましたが、こちらで紹介することにしましょう。

隣組＝1940年(昭和15)に制度化された国民統制のための地域住民組織です。

5～10軒を一単位として部落会、町内会の下に設けられ、配給、供出、動員など、行政機構の最末端組織としての役割を果たしていました。

隣組は、現在もありますが、加入は任意で、官憲の統制を受けない自由組織です。

当時の隣組は、江戸時代の五人組のような上意下達(じょういげたつ)のための機関でした。相互扶助などにも利用されましたが、政府や軍部が連帯責任や相互監察を通じて国民を統制したり、動員するために隣組を利用していたのです。

愛国婦人会＝出征軍人や傷病兵の慰問、軍人遺家族の援護などを目的として1901年(明治34)に創設された婦人団体です。

1942年(昭和17)、大日本婦人会に統合されました。

大日本婦人会は20歳以上の婦人は強制加入とされ、貯蓄増強、廃品回収、国防訓練などの国家奉仕に動員されていました。

古いアルバムに、愛国婦人会の襷をかけて道を行く母の写真があります。出征兵士の武運長久を祈る千人針への協力、壮行会の炊き出し、戦地の兵士へ送る慰問袋の手配・・・戦争に負けるとは露とも考えず、生まじめな母は、婦人会の有力メンバーとして一心に立ち働いていました。

千人針(せんになはり)＝一枚の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ刺して縫い玉をつくり、武運と無事を祈って出征兵士へ贈ったもので、日清・日露戦争の頃にはじまったようです。千人結びともいいます。

慰問袋＝戦地の兵士などを慰めるために、日用品や手紙を入れて送った袋です。